

イメージ調査法によって測定される感情イメージの展望(1)

—その理論的背景—

A Review on Affective Imagery Measured by the Inquiry of Affective Imagery (1): Focusing on Theoretical Background

堀内正彦*・鈴木賢男**・松野真***・
鈴木国威****・大石昂*****・岡田斉*****

Masahiko HORIUCHI, Masao SUZUKI, Makoto MATSUNO,
Kunitake SUZUKI, Takashi OISHI, Hitoshi OKADA

要旨：感情イメージとは、ある対象についてのイメージに伴う感情的側面であり、この感情イメージを測定するための方法の1つとしてイメージ調査法(上杉, 1981)がある。イメージ調査法によって測定された感情イメージは、上杉(1981, 1982, 1983a, 1989)、鈴木他(2008, 2009, 2010)によって行われ、様々な事象・対象についてのイメージの感情的な側面が示されている。イメージ調査法を採用した感情イメージの研究は、よって継続されている。本稿は、感情イメージとイメージ調査法について、イメージ調査法の特徴、他のイメージ測定法との比較、理論的背景、感情イメージの不変性・安定性などの観点からまとめた展望である。

キーワード：感情イメージ, イメージ調査法, 感情, イメージ測定

I はじめに

感情イメージを測定するためのイメージ調査法(上杉, 1981, 1982, 1983a, 1989)の基本的なアイデアは、現前にない対象をイメージとして想起した場合の感情的な側面に着目している点にある。また、後述するように、この感情イメージは、イメージする対象が置かれている状況およ

* ほりうち まさひこ 客員研究員・文教大学人間科学部(非常勤)・駒澤大学文学部(非常勤)

** すずき まさお 客員研究員・金沢学院短期大学 幼児教育学科

*** まつの まこと 客員研究員・昭和学院短期大学 人間生活学科

**** すずき くにたけ 客員研究員・大阪人間科学大学 人間科学部

***** おおいし たかし 富山大学名誉教授

***** おかだ ひとし 文教大学人間科学部

びその状況が変化することに影響されることが少ないと考えられる（上杉, 1989, 上杉・鈴木, 2000）。同一の対象に対する一時的な感情が遷移, あるいは混合する特性を感情の統合性と呼ぶこととすると, 複数の感情理論では, 短い期間での感情の統合性が示されている（Roseman, 2001; Smith & Kibby, 2001）。その一方で, それらの感情理論では対象に対する長い期間にわたる感情の統合性あるいは安定性についてはほとんど言及されていない。また, 単一的な感情ばかりでなく, 基本的な感情のまとまりの形成になるような複雑な感情の変化について触れていない。イメージ調査法による感情イメージは, このような統合性あるいは安定性を形成する要因を記述しようと考えられる。

イメージ調査法による測定によって, 個人を取り巻く様々な対象や事象に対するイメージの感情的側面, さらに感情価という合成変数を用いて対象間における連関性, 等々が示されている（上杉, 1981, 1983a）。これらの知見に基づいて今後さらに発展させるならば, 生活場面における心理学的問題を把握することが可能になると考えられる。

本稿では, 感情イメージならびにイメージ調査法の意義を, 定義, 測定と結果, および応用可能性の3つの側面から展望していく。なお, 第8回日本イメージ心理学会大会におけるシンポジウム（大石・鈴木・堀内・松野・鈴木・藤森, 2008）において, 本稿の一部が発表されている。

II イメージ調査法の特徴

イメージ調査法の概観 感情イメージの測定法の1つとして“イメージ調査法”と呼ばれる方法がある（上杉, 1981, 1982, 1983a, 1989）。イメージ調査法とは, 「対象語」（例えば, 私, 父, 母, など）と「感情語」（喜, 望, 愛, 驚, 悲, 恐, 怒, 嫌の8語）を対にして調査対象者に示し, 対象語の具体的な内容をイメージさせ, そして, その「対象語」のイメージと「感情語」のイメージが“どのくらいぴったりくるか”を5段階尺度（近い-やや近い-どちらともいえない-やや遠い-遠い）で調査対象者に評定してもらう方法である。対象語は研究目的あるいは調査対象者に応じて変更されているのに対して, 感情語は8語が一貫して用いられていた。そして, 対象語は, 調査対象者の日常生活において重要な意味を持つと考えられる言葉が選ばれていた。このことは, 後述するように, 抽象化された感情イメージの構造, あるいは, 対象語同士の連関構造へのアプローチに重要な意味を持つ。なお, イメージ調査法についてまとめると, この調査方法が直接的に測定しているのは, 対象語と感情語のそれぞれのイメージの主観的距離を測定する方法である。

また, イメージ調査法は, “多次元尺度構成法とSD法の統合的ないし中間的方法”とされている（上杉, 1981）。多数の事柄の間の近似性もしくは主観的距離感について評定する点については, 多次元尺度構成法とイメージ調査法の間で共通する。その一方で, 多次元尺度構成法において比較される事柄は, 同じ分類に属するが, イメージ調査法では, 対象語と感情語という異なる分類の間で比較している点が異なる。また, SD法とイメージ調査法はある尺度によって対象を評定する点が共通する。その一方でSD法ではコンセプトと呼ばれる対象について様々な形容詞対の尺度による評定を求めるのに対して, イメージ調査法では対象語と感情語の組み合わせについて近似性もしくは主観的距離感という単一の尺度による評定を求める点で, これらの調査方法は異なる。

感情イメージの測定法の比較 感情イメージ研究の多くは, 例えば, 幸せ, あるいは悲しいのような特定の感情を喚起すると考えられるイメージを想起したときの, 顔面の筋電図, 脈拍などを指標とした生理的变化を測定しており, 明確な強い感情に結びつきやすい場面などのイメージを

想起することによる感情喚起，あるいは感情喚起によるイメージ想起についての論究が多い（Miller, Patrick, & Levenston, 2002; Fridlund, Schwartz & Fowler, 1984; Schwartz, Brown, & Ahern, 1980; Lang, 1979）。それに対して，イメージ調査法は，想起したイメージに含まれる感情的成分を測定しており，感情イメージに関する一般的な研究とは異なる独特の視点である。イメージ調査法による感情イメージの研究は，生理的指標ではなく，意識レベルを扱う調査研究である。調査研究による感情イメージに関する研究の一例として宮崎・菱谷（2004）が挙げられる。彼らはあらゆる感覚様相において生起し，かつ情動喚起を伴うものとしてイメージを捉える立場に立って，その類知覚的側面と情動的側面にイメージ現実感を加えて統合的に，それらの構造について検討している。宮崎・菱谷（2004）のイメージの捉え方は，Richardson（1999）によるイメージの4分類の1つである個人的，あるいは現象的（主観的）体験として捉えようとする立場であり，イメージには感情的側面が伴うということを仮定している。イメージ調査法による感情イメージ研究の立場は，感情的側面がイメージに伴うことを仮定するという点について宮崎・菱谷（2004）と共通する。

イメージ調査法の理論的背景 感情イメージ，ならびに感情には，様々な特徴がある。イメージ調査法による感情イメージ研究は，感情イメージが感情に由来すること，そして，その感情は，感情を体験する主体と外界の反響作用による内的状態およびそれについての意識という特性に着目している。感情イメージ（上杉，1981）は何らかの対象や事象が引き起こす感情に由来するとされている。例をあげれば「試験」は，学生ならずとも重苦しさや緊張感を伴った嫌悪や不安の感情に結びついているであろう。そして，外界からの刺激によって喚起される感情が記憶や思考などの作用を受けて，感情イメージが形成されると仮定できる。その過程の重要な要因である感情については，“現実世界との関係で，主体との反響作用（エコー）によって生じる内的状態であり，その内的状態についての意識”である（上杉，2004）。感情は現実世界の対象によって引き起こされるが，現実世界が消失した後も残存し，またさらに現実世界の想起，すなわちイメージに伴って再現される。いうまでもなく，現実世界によって引き起こされた感情と，その残存，あるいは想起に伴って再現された感情は同一ではない。対象の知覚ではなく，そのような対象の想起に伴って喚起された感情の状態が，感情イメージと定義されている（上杉，2004）。感情と感情イメージのこの区別には，知覚とイメージの関係に対するパラレリズムを指摘できる。すなわち感情は感情を喚起する対象が現前するときに意識されるものであり，感情イメージは，対象を想起（イメージ）したり，対象に関し想念をめぐらせたりした時に意識されるものであるとして感情と感情イメージを区別している。これらの点は，イメージ調査法に明示的に関係しているわけではないが，この測定方法を採用して感情イメージを探求するための理論的背景と考えられる。

また，イメージは想起する対象を必然的に伴うものであり，そのような特性を対象性とここでは呼ぶこととする。この対象性は，様々な感覚モジュールのイメージについて当てはまる特性であり，感情イメージも，現実体験の内面化の過程において，ある種の感情との安定的な結びつきを持つにいたった対象や出来事のイメージである。この感情イメージの対象性は，測定方法と関わりなく存在する感情イメージの特性であるが，イメージ調査法によって感情イメージを測定し，検討しようとする立場も，この特性を踏まえている。また後述するように，イメージ調査法によって感情イメージを測定することの有益性につながるのである。

なお，上杉（1981, 1989, 2004）による感情イメージと宮崎・菱谷（2004）による情動イメージを比較すると，上杉はイメージ，感情，そして対象性を論じている一方で，宮崎・菱谷は田畠

(1992), Ahsen (1999), 河合 (1991) などの臨床心理学的な立場からの知見に基づいて、イメージの主観的性質の1つとして情動イメージを扱っている。宮崎・菱谷による情動イメージと上杉による感情イメージは、研究目的の違いによって測定方法に相違があるが、どちらの考え方もイメージに随伴する感情的側面を仮定し、なおかつイメージに関する類知覚的側面と感情的側面という2つも側面を考慮している点において近似する概念であると考えられる。

イメージ調査法と構造的アプローチ イメージ調査法では、8つの感情を基本的感情としている(上杉, 1989; 上杉・鈴木, 2000)。この8感情は、Plutchik (1960) の喜, 望, 愛, 驚, 悲, 恐, 怒, 嫌の8感情に基づいている(水島, 1978)。これらのうち、「受容」と訳されることの多い“acceptance”は「愛」、また一般には「希望」または「期待」と訳される“hope”は「望」とされた。

感情イメージ研究における測定法の1つであるイメージ調査法(上杉, 1981)は、ある対象のイメージが様々な感情に対してどのような心理的距離にあるかを求めるものである。したがって、イメージ調査法を採用する感情イメージ研究においては、何を基本的感情とするかは重要である。それと共に重要なのは、それらの基本的感情が、様々な研究者によって提唱される基本的感情と比較して少なくとも極端に偏っていることはないということであると考えられる。

この点について、感情の評価理論(appraisal theory)を唱えるRoseman (1984)は17の感情を、また北村・木村(2006)は7感情をそれぞれ基本的感情として採用しているが、どちらのリストにおいても“acceptance”が採用されていない点を除けば、これらの研究との比較における限りでは、Plutchik (1960)による基本8感情は、特に偏りがあるとは言えない。

このようにイメージ調査法によって測定される感情イメージでは、Plutchik (1960)の8感情を基本的感情と考え、それらの相互関係を検討するという、構造的アプローチを方法論として取っている(上杉, 1981, 1982, 1983a)。感情に対するこのような構造的アプローチの初期の試みは、上杉・佐々木(1980)による「俳画的箱庭」における感情投影の研究においてみられる。「俳画的箱庭」は箱庭療法のバリエーションとして水島(1978)により開発された臨床的手法であるが、この手法を用いて、Koch (1970) 林・国吉・一谷訳 (1970)の空間象徴理論をヒントにしながらか、箱庭に投影された感情の表現型の分析を試みている(上杉・佐々木, 1980)。

この研究において、「喜, 愛, 嫌, 悲」の4つの感情について、調査対象者にそのイメージ(一次的イメージ)の想起を求め、そのイメージをさらに「木, 草, 石, 人形」の4つの材料により空間的に展開・布置するよう求めている。このようにして箱庭に展開された配置は、二次的イメージと呼ぶことができる。ここで一次的に想起されたイメージは感情イメージと呼ばれている(上杉・佐々木, 1980)。この手法における測定対象は、箱庭の中に空間的な配置として外的に構成された二次的イメージであり、この二次的イメージを対象として、材料間の空間的距離の測定が行われている。そして、ここに表された空間的關係は、心理的空間の投影であるとみなされ、感情および対象の心理的構造が因子空間に表現されるのである。

この後、イメージ調査法という新たな手法の確立の過程においても、調査対象者がカードを空間的にレイアウトする代わりに、対象語に対する各感情語の心理的距離の評価を求めることによって基本的感情と感情イメージ、及び諸対象の心理構造を分析するという研究手法が継続的に用いられている(上杉, 198)。さらにイメージ調査法を採用した感情イメージの研究は、対象語の感情的因果関係を因果的連関図(パス図)として記述する試みへと発展している。なお、Plutchik (1960)が基本感情とした8つの感情を、一連のイメージ調査法(上杉, 1981, 1982, 1983a, 1989)は感情語として使用しているが、基本感情に言及するPlutchik (1960)等の様々な

諸説との比較は十分になされてこなかったところがあり、これは今後の課題である。

イメージ調査法による測定と対象性 イメージの基礎的特性としてまず第1に対象性が指摘される(上杉, 1983b)。イメージは、はじめに知覚像の再生として成立し保存されるが、しかし同時にそれは内面化の過程を経て、表象としての機能を獲得し対象からの相対的な自立性を持つに至る。この点でイメージは知覚そのものや知覚に直接由来する残像、直感像とは区別される(上杉, 1983b)。イメージは対象から相対的に自立することにより、表象としての機能を確立するのであるが、その起源において対象なしには成立しえないのであり、イメージと対象との関連性もしくはイメージの対象に対する依存性は、イメージが対象から相対的に自立した後も失われることはない。この意味においてイメージは対象的なものであり、イメージは対象なしには成立しえない。したがって感情イメージもまた対象と不可分に結びついているのである。

イメージ調査法によって測定される感情イメージは、対象についての記憶あるいは思考などの認知的作用が不可欠である。したがって、対象を認知することを抜きにして、この感情イメージは成立しない。イメージの対象性を強調することを視野に置いて、イメージ調査法は感情研究を認知心理学の枠組みにおいて、または認知と感情の統合的把握のなかで進めようとしていた。感情と認知を関連付ける、あるいは感情過程に認知過程を結合するイメージ調査法による感情イメージ研究の試みは、感情の評価理論(Arnold, 1960; Lazarus, 1966; Roseman, 1984)に共通するものである。このような感情イメージの対象性の把握は、後述するイメージ調査法において具体化されている。

イメージ調査法による感情イメージの安定性と普遍性 感情は具体的で個別的な現実との関わりの中で成立し意識される。しかしこのような個別的・具体的な関わりから出発して、感情イメージは普遍性を獲得しうるのだろうかという疑問が生じる。感情イメージは個々の体験において成立する感情から出発して、どのようにして個人内の安定性、さらには個人間の安定性(普遍性)を獲得することができるのだろうか。

まず何よりも重要なことは、感情は状況に依存するが、場面は異なっても、同一の対象や事象によって喚起される感情には、その根底において共通するものがあるということである。気を付けるべきは、感情の生起は状況によって変動するが、しかし、その根底には一貫した感情的内容があるということである。例えば、人はその存在を脅かし否定しようとするものに対しては、恐怖や不安、嫌悪といった不快の感情を抱くであろうし、その逆に存在を肯定し拡張させる刺激に対しては、安心や喜び、好意といった快の感情を抱くであろう。感情イメージの安定性や普遍性の根拠はここにあると考えられる。

上杉(1989)、および上杉・鈴木(2000)によれば、このようにして感情イメージが普遍性を獲得し、さらにはそれが「基底的感情イメージ」として、日常における感情体験を逆に規定するものとなっていく経過は次のようなものである。まず概念的な前提として、感情イメージは、対象なしには成立することができないのであるが、同時にそれはイメージであるが故に対象からの乖離という側面をも持っているということが指摘できる。そして、感情イメージはこのようにして現前する対象や事象への依存性を弱めるという変化によって相対的な自立性を獲得し、「より抽象的概括的なもの」(上杉, 1989)となると同時に、対象の感情的意味としての性質をもつように変化する。すなわち、経験の繰り返しと蓄積を通して、イメージは一般化され、それとともにその感情的側面も個人のうちにおいて普遍性と安定性を獲得し、逆に個人の感情体験を規定するものとなるというのである。

引用文献

- Ahsen, A. (1999). Image and reality: Eidetic bridge to art, psychology and therapy. *Journal of Mental Imagery*, 23, 1-16.
- Arnold, M. B. (1960). *Emotion and personality. Vol.1 .Psychological aspects*. New York: Columbia University Press.
- Fridlund, A. J., Schwartz, G. E., & Fowler, S. C. (1984). Pattern recognition of self-reported emotional state from multiple-site facial EMG activity during affective imagery. *Psychophysiology*, 21, 622-637.
- 河合隼雄 (1991). イメージの心理学 青土社
- 北村英哉・木村晴 (2006). 感情研究の新たな意義 北村英哉・木村晴 (編) 感情研究の新展開 ナカニシヤ pp.3-20.
- Koch, C. (1970). *The tree test: The tree-drawing test as an aid in psychodiagnosis*. Bren: Verlag Hans Huber.
(コッホ, C. 林勝造・国吉政一・一谷彊 (訳) (1970). パウムテスト—樹木画による性格診断法 日本文化科学社)
- Lang, P. J. (1979). A bio-informational theory of emotional imagery. *Psychophysiology*, 16, 495-512.
- Lazarus, R. S. (1966). *Psychological stress and the coping process*. Now York: McGraw-Hill.
- 松野真 (2011). 若年層における dating violence の予防教育推進のための要因に関する研究 日本学術振興会科学研究費補助金・研究実績報告書
- Miller, M. W., Patrick, C. J., & Levenston, G. K. (2002). Affective imagery and the startle response: Probing mechanisms of modulation during pleasant scenes, personal experiences and discrete negative emotions. *Psychophysiology*, 39, 519-529.
- 宮崎拓弥・菱谷晋介 (2004). ポジティブ・ネガティブ情動イメージの構造 イメージ心理学研究, 1, 48-59.
- 水島恵一 (1978). 実証的かつ実感的体験研究の方法—「体験と意識」に関する個別・総合プロジェクトに向けて— 文教大学紀要, 12, 1-11.
- 大石昂・鈴木賢男・堀内正彦・松野真・鈴木国威・藤森進 (2008). 「感情イメージ」とは何か—上杉喬のイメージ心理学を読み解く— イメージ心理学研究 6, 19-43.
- Plutchik, R. (1960). The multifactor-analytic theory of emotion. *Journal of Psychology*, 50, 153-171.
- Richardson, J. T. E. (1999). *Imagery*. Hove, UK: Psychology Press.
- Roseman, I. J. (1984). Cognitive determinants of emotion: A structural theory. *Review of Personality & Social Psychology*, 5, 11-36.
- Roseman, I. J. (2001). A model of appraisal in the emotion system: Integrating theory, research, and applications. In Scherer, K. R., Schorr, A., & Johnstone, T. (Eds), *Appraisal processes in emotion*. New York: Oxford University Press, pp.68-91.
- Schwartz, G. E., Brown, S. L., & Ahern, G. L. (1980). Facial muscle patterning and subjective experience during affective imagery: Sex differences. *Psychophysiology*, 17, 75-82.
- Smith, C. A. & Kibby, L. D. (2001). Toward delivering on the promise of appraisal theory. In K. R. Scherer, A. Schorr, & T. Johnstone (Eds), *Appraisal processes in emotion*. New York: Oxford University Press, pp.121-138
- 鈴木賢男・大石昂・松野真・堀内正彦・鈴木国威・藤森進・岡田斉 (2008). 「感情イメージ調査」についての研究—年代を経た大学生においてみられた感情イメージ構造の安定性 人間科学研究 (文教大学人間科学部紀要), 30, 121-132.
- 鈴木賢男・大石昂・松野真・堀内正彦・鈴木国威・藤森進・岡田斉 (2009). 「感情イメージ調査」についての研究 (Ⅱ)—諸対象についての感情価値度の因果論的構造と性格次元との関連性— 人間科学研究 (文教大学人間科学部紀要), 31, 189-205.
- 鈴木賢男・大石昂・松野真・堀内正彦・鈴木国威・藤森進・岡田斉 (2010). 「感情イメージ調査」についての研究 (Ⅲ)—個別対象の感情イメージ構造の安定性と対象語・感情語の選定— 人間科学研究 (文教大学人間科学部紀要), 32, 173-188.
- 田嶋誠一 (1992). イメージ体験の心理学 講談社
- 上杉喬 (1981). 感情イメージの研究 人間科学研究 (文教大学人間科学部紀要), 3, 22-38.

- 上杉喬 (1982). 感情イメージの研究 (Ⅱ)―労働場面における感情イメージ― 人間科学研究 (文教大学人間科学部紀要), 4, 29-41.
- 上杉喬 (1983a). 感情イメージの研究 (Ⅲ)―労働場面における感情イメージの諸関連― 人間科学研究 (文教大学人間科学部紀要), 5, 11-20.
- 上杉喬 (1983b). イメージの知覚的性質 水島恵一・上杉喬 (編) イメージの基礎心理学 誠心書房 pp.7-49.
- 上杉喬 (1989). 感情イメージの研究 (Ⅳ)―対象による違いと性による違い― 人間科学研究 (文教大学人間科学部紀要), 6, 1-11.
- 上杉喬 (2004). イメージの世界 文教大学臨床心理学科編集委員会 (編) 人間科学としての臨床心理学 金剛出版 pp.17-34.
- 上杉喬・佐々木正宏 (1980). 『俳画的箱庭』における感情投影の基礎研究―試論― 体験と意識に関する総合研究第2集 (文教大学人間科学研究会報告書), 95-99.
- 上杉喬・鈴木賢男 (2000). 感情イメージの研究Ⅳ―感情価とパーソナリティ特性の関連― 生活科学研究 (文教大学生生活科学研究所紀要), 22, 121-132.

